

# 『史記』を通して漢文の読解力を伸ばし、 作品への興味関心を高める



山形県立米沢興譲館高等学校

廣瀬 辰平

## 一 はじめに

本稿は、授業で生徒に学力を付けるために、どのように教材を扱えば良いか日々試行錯誤しながら実践した一例である。普段大切にしていることは、力を付けるために授業を考え、その授業にいかにか教室にいる生徒全員を参加させるかの工夫である。教材への興味・関心を高める工夫や、明確な授業のねらい、力が付いているかどうかの確認をいかにするか、日々反省すべきことが多いが、実践している授業の一端としてお読みいただければと思う。

## 二 教材観

本稿で取り上げるのは数研出版『古典B漢文編』に収録されている『史記』の「鴻門之会」「四面楚歌」の場面を扱った授業である。躍動感のある描写や、個性ある登場人物と、生徒の興味関心を引き出しやすい教材である。また、典型的な句形を用いた会話文があり、人物関係の整理など基礎的な読解力を身につけるにも適切であると考え、「おもしろい」だけでは、読解が拡散して何が生徒に残ったのかが分からない。しかし、正しい読解を土台に、生徒が「もっと深く読みたい」、「他の場面も読みたい」と思うことができれば、今後の学習にも大きくつながる教材になると考えている。また、本校では「音読のすすめ<sup>〔注〕</sup>」という自主教材があり、通年で漢文音読の取り組みをしている。その文章に多く登場する歴史的な場面への興味関心が引き出せれば、一単元に留まらず、いつそ生徒の漢文学習に資するとも考えている。

〔注〕米沢興譲館高校では、学則として掲げられる文章「弟子職」(管子より)から始まり、最後は「長恨歌」に至るまで、計十九の文章が取られた本冊子を、三年一学期までに音読するという取り組みがある。指定された期間に、指示された文章を授業以外の時間で国語科教員の前で音読するという取り組みである。

## 三 生徒観

本授業は二年理科に昨年度実践したものである。本校は、一学年五クラスで、二年次に理科一クラス、普通科理科二クラス、文系二クラスに分かれる。理科は、理科・数学に興味関心が高く、探究的な取り組みに積極的なクラスであるが、古典の基礎的な学習には積極的とは言えず、おろそかにしがちである。しかし、興味を持ったことへの学習意欲、行動力はある。授業展開の工夫があれば、大きな力を発揮するクラスでもある。そこで、普段から、解説は最低限に抑え、生徒自身が協力しながら読解を進め、振り返りを行うことで正しい読解ができていくかを確認することを中心に授業を展開している。一年間の授業の中で、分からないところについて辞書や文法書を引いたり、理解した内容を他の生徒に説明したりする場面も多く見受けられ、また、ポイントを解説する際には意欲的に聞き取り、理解しようとする姿勢が見られ、古典への学習への主体的な雰囲気、授業を通して醸成されてきたと感じている。

## 四 授業にあたって

ここでは、各場面の読解の授業をどのように進めているか、ということと、ジグソー活動を取り入れたまじめについて、授業を組み立てる際に考えたことを整理しておきたいと思う。

「鴻門之会」から「四面楚歌」に至るまでの読解においては、正しい書下し及び現代語訳はもちろんであるが、登場人物の関係や行動を整理すること、心情の変化、言動の意図などを確認することを中心に進めた。授業の際は、毎時間、内容読解に関する目標と文法に関する目標を生徒に示し、個人で考え、グループで解決し、個人で振り返る(次頁の資料1・2参照)とい

う形式で進めている。振り返りのプリントを回収し、理解が足りない・深まりが足りないと感じた時は、次に導入で振り返ることもある。プリント返却の際に、裏面に補足の質問や、生徒の解答例をいくつか印刷し、それをもとに前時を振り返り進むことが多い。振り返りのプリントを分析し、必ず次時に触れることで生徒の学習意欲を高められるよう心がけている。また、前時に何を学び、本時で何をどのように学ぶのかを説明することで、学びにつながりを持たせることも意識している。

『項王自刎』の場面において、項羽はやや死に急いながらも取れる形で自刎し、その後劉邦が漢を立てるわけであるが、歴史的に大きな転換の時代であることを踏まえ、『史記』に描かれる人物の個性に焦点を当て、単元の振り返りを行いまとめたいと考えた。

また、読み進めた場面を、歴史の勝者・敗者という視点で読みなおすことで、人物の特徴・人間関係・場面の意味などについて新たな気付きが生まれるのではと考えた。細部から全体を組み上げ、全体から細部を深める読みを経験させようというねらいであった。ジグソー法を取り入れた理由は、すべての場面を全員で詳細に読みなおす時間はないこと・小さな発表の機会を一人一人に持たせることで、全員を主体的に読解に向かわせられること・他者の意見を聞き、自分の考えを深める経験を持たせられること、などが挙げられる。

## 五 授業の実際

### (一) 単元全体の構成

- ①「鴻門之会」の読解（計六時間）
- ②「四面楚歌」の読解（計三時間）
- ③単元のまとめ「なぜ項羽が負け、劉邦が勝ったのかを考える」（二時間）

### (二) 読解の授業においての一時間の授業基本構成

①音読  
単元の最初は、教師による範読及び群読を行う。それ以降は、グループごとの音読を行う。グループで一人が教科書の訓点付きの本文を見ながら範読し、その他のメンバーが白文を見ながら同じ箇所を群読する。読むペースは読点を一区切りにし、範読・群読を繰り返す。白文を見て読むことで、一文の構成を考えながら読む習慣を付けさせるねらいで行っている。

②前時の振り返り（クラス全体）及び目標提示  
振り返りのプリントの前時分に目を通し、理解が浅

鴻門之会 舞臺 振り返り 氏名	問一 次本文の右に書き、左に現代語訳を書きなさい。
今日之事何如。	
臣請入与之同命。	
欲止不内。	
問二 項之同命とはどういうことか。	
問三 グループで話し合った会話文の特徴を書きなさい。	
自己評価	解説に必要な前後句について構や辞書を使い確認しましたか。 1 確認できた 2 やや調べた 3 あまり調べていない 4 何を調べていいかわからない 5 何も調べていない
疑問・問題形の訳はたいていできていますか。	1 できた 2 概ねできた 3 やや確認がわる 4 できていないことが多い 5 できなかった
場面の理解はできていますか。	1 できた 2 概ねできた 3 やや確認がわる 4 できていないことが多い 5 できなかった

資料 1

い場所・足りないところ・良い意見などを取り上げて、前時のポイントを振り返る。句形や重要語句など文法事項で繰り返し確認したいものは、類題を解かせることもある。

その後、授業の目標を提示し、意識して欲しいことを説明する。意識させたい文法事項などがあれば、始めに解説することもある。

### ③読解（個人及びグループで課題に取り組み）

今回の単元では、予習を課していないので、前半の時間は個人で書下し・現代語訳に取り組み、後半分からは個人を中心にグループで話し合いながら解決し、

鴻門之会 舞臺 振り返り 氏名	問一 次本文について①現代語訳しなさい。 臣 死 且 不 避。 厄 酒 安 足 辞
問二 ここで舞臺は何を言いたかったか、その説明（最も適切なものを次から選べ）。	
ア 酒をのみで死ぬ本望である。	
イ 項羽を殺すこともめらわななので、酒のためなら、死も覚悟している。	
エ 酒を断つて殺されても後悔はない。	
問三 沛公が威嚇に入ってから功績を一つ挙げよ。	
問四 舞臺は、項羽のどのような点を、どのように批判したか、舞臺に説明しなさい。	
自己評価	グループで協力して理解を深めることができましたか。 1 できた 2 概ねできた 3 やや確認がわる 4 できていないことが多い 5 できなかった
疑問形の訳はたいていできていますか。	1 できた 2 概ねできた 3 やや確認がわる 4 できていないことが多い 5 できなかった
舞臺の論理は理解できていますか。	1 できた 2 概ねできた 3 やや確認がわる 4 できていないことが多い 5 できなかった

資料 2

内容的な問いに取り組み。

教師はこの間、机間巡視し、観察や理解の確認をする。質問は受け付けるが、考えるきっかけを与える以上のことは極力しない。クラス全体で共通の躰つまずきがあれば、時間を見ながら、かみ砕いて材料を提示することもある（教材研究の甘さによるので、極力このような状況は作らないよう心がけたい）。

例えば「頭髮上指」では、「於是」や「すなはち」の確認、樊噲の会話文の書下し及び現代語訳（疑問形・願望形を意識して）、張良と樊噲の会話文の特徴、などを課題にし、一〇分間で解決させる。前頁の資料1はその授業で用いた振り返りプリントである。

④振り返り（個人）

この時間は完全に個人で取り組む。五分〜六分程度の時間、集中して取り組む。自己評価の欄も設け、授業への参加態度面で一項目、授業の目標の達成度で二〜三項目自己評価させ、再度授業のねらいを意識させている（資料1・2参照）。

(三)単元のまとめについて

「四面楚歌」の場面での項羽の詩には、「時不利兮驂不逝」とあり、項羽が主観的には時運に恵まれなかったことを嘆いているように描かれている。そこで、今まで学習した「鴻門之会」の場面をもう一度読み返し、「なぜ項羽が負け、劉邦が勝ったのか」を考えることにした。

授業の展開としては、ジグソー法を用いた。詳細は以下の通りである。

①本時の課題

なぜ項羽が負け、劉邦が勝ったのか、以下の事に留意して説明する。

・項羽・劉邦の人物像に触れる

- ・項羽・劉邦の人間関係（部下など）に触れる。
- ・具体的な場面・状況を根拠にする。

②本時の流れ

- ・本時の流れの説明（約一〇分）
- ・本時の課題を提示し、活動の意図や流れを、資料3のプリントを用いて説明。
- ・エキスパート活動（一八分）

資料4のプリントを用いてグループ学習。A・B・C各班で、今までの読解を生かして下記の場面を読み、項羽・劉邦の性格、取り巻く部下の様子を整理し、課題について考える。

**四面楚歌 学習計画**

**本時の課題**

○なぜ項羽が負け、劉邦が勝ったのか、以下の事に留意して説明する。

- ・項羽・劉邦の人物像に触れる。
- ・項羽・劉邦の人間関係（部下など）に触れる。
- ・具体的な場面、状況を根拠にする。

**①本時の流れ**

- ①本時の流れの説明（約一〇分）
- ・課題の提示
- ・活動の意図、流れの説明
- ②エキスパート活動（一八分）
- ・A・B・Cのそれぞれの課題に取り組み、移動
- ③ジグソー活動（一五分）
- 集まったジグソー班の中で、A班だった人（二入いる場合はB、出席番号が奇いほう）から時計回りに、エキスパート活動でまとめたことを発表
- その後、本時の課題について考える。
- ④まとめ（五分）
- 本時の課題について個人でまとめる

**②エキスパート活動**

共通：今までの読解を生かすこと

A班：「豎子、与に謀るに足らず」の場面を読み、項羽・劉邦の性格、取り巻く部下の様子を整理し、課題について考えよう。

B班：「頭髮上指す」の場面を読み、項羽・劉邦の性格、取り巻く部下の様子を整理し、課題について考えよう。

C班：「剣舞」の場面を読み、項羽・劉邦の性格、取り巻く部下の様子を整理し、課題について考えよう。

考えたことを伝える

- ・人の考えを、正しく理解する。
- ・自分の考えを伝える、他者の考えを聞くことで、さらに深い思考へ！

資料3

**四面楚歌ワークシート①**

番 氏 名

<p>エキスパート活動</p> <p>項羽・劉邦の人物像を整理する</p> <p>【項羽】</p> <p>項羽 劉邦の部下との関係や、部下の人物像等</p> <p>【劉邦】</p>	<p>項羽をなす具体的な場面、状況</p> <p>【項羽】</p> <p>【劉邦】</p>
--	---

資料4

ならないよう、エキスパート活動の際には、「人物像」「部下との関係」について、そう感じた根拠を本文によりながら説明するよう指示した。場面ごとに、リード文・脚注も踏まえながら振り返り、改めて考える姿が見られ、全体像が見えているからこそ深まる読みをしていたと感じた。

ジグソー活動では、まずは一人二分間、エキスパート活動で理解した内容を発表、その後「なぜ項羽が負け、劉邦が勝ったのか」という課題について意見を出し合った。そこで考えたことを最後に個人でまとめて本単元を終了した。以下に、生徒が最後にまとめた内容の抜粋を掲載する。

○劉邦は先のこと考え、軍を動かしたり、自分の考えだけでなく部下の話を聞き、その意見も取り入れられる人であるが、項羽はその場の感情で行動を起こし、部下の話を無視して行動する人物であった。そのため部下からの信頼が厚い劉邦は部下にも恵まれどんどん勢力を強めていくのに対し、項羽は部下から裏切られてしまう。そして兵力、士気が劣り、項羽は負けてしまった。

○項羽は単純で感情的で、敵に対してもお人よしで、劉邦は礼儀を重んじ決断力があった。項羽は感情的な判断で鴻門之会でミスを犯し、部下に逃げられ、劉邦はその人柄で部下に慕われ敵の項伯が守ることにするほどであった。その結果項羽軍は力を失い、劉邦軍が一致団結したため、項羽が負け、劉邦が勝った。

○項羽は単純で感情的だったのに対し、劉邦は策略家で部下からの信頼も厚かった。そんな劉邦の人柄にひかれ、また項羽についていけないと思った項羽の部下が、劉邦側に寝返り、項羽はどんどん

不利になり、結果として項羽が敗北した。

作品の一部を読んだの考えであり、様々説明不足もあるが、生徒は各場面の読解をもとに、自分が感じたことを説明しようとし、一人一人意欲的に読解に向かっていたことが窺えた。

## 六 授業を振り返って

授業で大切にしていることは、目標に従って授業をデザインすること、その授業で学力が付いているかどうかの判断をすること、反省があれば次に生かしていくことである。とくにグループワークを用いる時は、ただ「話し合わせる」に終わらないような、工夫が必要である。それには、授業の意義を、日々生徒に語る必要がある。毎時間うまくいくわけではなく、失敗することもあるが、目標に従って授業をデザインしている限り、次の授業で修正をしたり、改善を試みたりすることができる。

「鴻門之会」では、使役・受身・疑問・反語・抑揚などの句形、「すなはち」「つひに」の用法の違い、「置き字」の働き等、文法事項を理解することでつかむことができる、文脈のニュアンスがある。文法事項を理解していると文章を深く読むことができるという気付きを読解において大切にしたい。ただし、扱う文法事項が多くなりすぎるとねらいが拡散し、断片的な暗記事項（多くはすぐに忘れ去られてしまう）になってしまうため、この時期、この単元で最低限おさえたいことに絞らねばならないことを意識した。

単元のまとめについてであるが、生徒の書いたものを見ると、概ね人物像に迫る・部下との関係に注目するなど、こちらが最低限意図したことはできていた。また、最後のグループでの話し合いでは、様々な人物

の名前が飛び出し、読解の際には感じられなかった臨場感を味わいながら振り返っている生徒の姿も見受けられた。細部まで読み込もうとすると必要な知識の伝達が先立ってしまうところだが、全体を見渡した後細部に戻ったので、細部を読みこむことで文章が生きて読み取ることができたという経験をさせ、作品への興味関心を高めさせられたと感じている。

最後にアクティブラーニングについてであるが、いかに書かせるか・話させるか、など能動的に言語活動に取り組む授業の工夫は以前からなされてきたことである。新しい言葉によって、その価値が再評価されたり、活発になったりすることは基本的に良いことだと思う。しかし、教材観・生徒観のない「アクティブラーニング論」にはあまり賛同できない。基礎学力がアクティブラーニングか、という構図にも違和感がある。学びはすべて生徒自身が学力をつけるために行われるもので、そのプロセスをいかに教師が考えるかが大切である。今回『史記』のまとめとして、すでに学習した場面に再度戻る形でジグソー法を取り入れた理由の一つに、復習によって読みを深めて欲しいという思いがあった。理数科ということもあり、国語の家庭学習時間はほとんどないに等しいクラスである。しかし、復習がなければ、授業内容の理解・定着はあり得ない。そこで、時間ときっかけさえあれば熱心に取り組むクラスに取り入れてみようというねらいも一つにはあった。どこまで効果があったかを示す数値的なデータはないが、少し前に行なった学びとのつながりが意識できた時間だったと考えている。